

# カグラ牝堕ち調教-体験

魔導士ギルド「人魚の踵」〈マーメイドヒール〉。

属する魔導士が全て女性という特殊なギルドに、ある地主貴族からの依頼が届く。

「——「希望魔導士：カグラ」……私指名の個人宛依頼か」

依頼内容は盗賊、害獣、魔獣からの防衛。

依頼主とはある田舎の屋敷に住む貴族だが、最近になって近辺で盗賊や害獣・魔獣による被害が起きており、強い魔導士の助けを必要としているとのこと。

大魔闘演舞でカグラの強さを見た貴族は、彼女なら信頼できると担当魔導士にカグラを指名していた。

（この地方での被害は話に聞いていないが……田舎ゆえに伝わるのが遅いのか？ それとも大した被害ではないのか……だが、事実だとしたら無視はできないな。報酬も悪くない……）

特にニュースになっていないが、小規模だろうと害悪は減するに限る。

田舎だが依頼主は地主貴族だけあって報酬は良く、成功すればギルドにも貢献できる。

ちょうど新たな依頼を探していたカグラは依頼書を手し、すぐ向かうため準備を始める。

「私たちが付いていこうか？」

「いや、流石にこの程度なら私一人で大丈夫だろう」

「でもカグラ指定って怪しくない？ そりゃウチでは最強だから指名来てもおかしくないけどさあ」

「男の屋敷にカグラ一人で、ねえ……変な奴の罠かもしれないよ」

「だとすれば、斬り伏せるまでだ」

「それもそうか！」

「カグラに限って心配いらないよ！ じゃ、いつてらっしゃーい！」

ギルドの仲間の一部は依頼内容に疑いの目を向ける。

依頼主はカグラの強さを理由に指名しており、実際にカグラは「人魚の踵」最強の魔導士だが、同時に端麗な容姿、抜群のスタイルを持つ美女でもある。

男性人気が非常に高い女魔導士の一人で、もしかすれば彼女に目を付けた者の悪戯や罠である可能性も捨てきれない。

……が、その不安を一笑に付すカグラ。彼女の実力はただギルド最強だけでなく、今やフィオーレ王国でも指折りと言っている。

彼女以上の魔導士はごく限られており、罠にかけたからと言って簡単に手籠めにできるほどヤワな女ではない。

カグラの強さを信じる者たちは全く心配せず、どうせカグラのことだからすぐに終わらせてくるだろうと笑顔で見送るのだった。



【よくぞ参られたカグラ殿。まさか本当にお受けいただけるとは……こちら、粗茶ですが】  
「こちらこそ、依頼を出していただき感謝する。して、その盗賊、魔獣というのは……」

——貴族の屋敷。

貴族は典型的な恰幅の良い中年だが、人当たりは悪くなく、来訪したカグラを快く迎え入れて来客用の紅茶を出す。

カップを片手に一口二口すすりながら、カグラは依頼内容を改めて紹介される。

最近になって盗賊や害獣・魔獣が出るようになり、それらから護衛、場合によっては退治・駆除してほしいということ。

出現タイミングは昼夜問わず不定期だが、特に今日から明日にかけて家族や取引先などの来客があるため、実力者の護衛が欲しかった、とのことだ。

「なるほど。せっかく家族が来ても襲われてしまっはな」

【ええ、全くです。このあたりはまだ物騒な連中がいてね……「人魚の踵」最強のカグラ殿が目光らせていただければ、少しは治安も良くなるかと思ひまして……あ、自慢の高級茶です、よろしければこちらも……】

「いいのか？ ん……良い香りだ。ありがたくいただこう」

家族との再会を平和に迎えたい、と聞き、カグラは貴族に感情移入する。

気を許して紅茶を一杯飲み切ると、続く自慢の高級茶にも口を付ける。

片田舎に住んでいるとはいえ貴族が自慢するだけがあり、香りは心地よく、甘い匂いが頭の中まで広がる快感で、ふわとした浮遊感さえ覚え……

「本当に……良い、香りだな……なんとも、心地よく……」

【ええ、そうでしょう……何せ——】

（なんだ、これは……心地よすぎて——いかん、眠——）

貴族が茶の説明に入った途端、カグラは快感と同時に膨らむ猛烈な眠気に襲われる。

依頼の真っ最中に眠るなど、普段のカグラなら有り得ない行為。

仮に眠気を感じようものなら、舌を噛んでも意識を保つ。

だが既に眠気は完全に肉体と思考を支配しており——

【非合法の媚薬と睡眠薬を入れているからなあ……】

舌を噛むことすらできず、零れた紅茶のように意識を沈ませる。

いくらフィオーレ指折りの実力者でも、こうなっては赤子も同然。  
完全に無力化したのを確認し、貴族は一人の雄となって本性を現す。  
いかにもカグラの嫌いそうな下衆の笑みも、今の彼女には届かず、静かな寝息を立てていた……

——……

————……

ぎしっ♥ にゅふっ♥ ずりゅ……っ♥

「ん……っ、う……」

（ここは……？ 確か、私は依頼を……貴族の屋敷に向かって……——っ?!）

閉じていた臉がゆっくり開く。意識が鮮明になっていくにつれ、カグラは今の状況を整理する。  
依頼を受け、貴族の男と話し、いつの間にか眠りにつき……そして今、ベッドに寝かせられた上で縛り付けられていること、身体を一人の男が舐め回していることに気付く。

「おい、何をしている！」

【おお、やっと目覚めたか。「人魚の踵」最強も僕にかかれれば造作もなかったなあ】

男の正体はやはり依頼主の貴族。  
場所も変わってはいるが屋敷の中のように、おそらくは男の部屋。  
状況から、何らかの方法——真っ先に思いつくのは紅茶に仕込まれた睡眠薬——で眠らされ、拘束されたのだろう。  
今回の仕事はカグラを狙った偽の依頼ではないかと仲間たちが心配していたが、正にその通りだったというわけだ。

「怪しいとは思っていたが……本当に偽の依頼とはな。少しでも気を許したのは私の失態——しかし……！」

巧妙な搦め手とはいえ、全く気付けなかったことに情けなさを、いいように身体を舐められていることに恥を覚えるが、それ以上の屈辱と怒りで手足に力を込める。  
外見は容姿端麗なカグラだが、魔力はもちろん身体能力も相応に高い。  
半端な拘束具など贅力で壊せてもおかしくないのだが、身体に力が全く入らず、普段の力さえ発揮できない。

「騙しと分かった以上、容赦はしない！ こんな拘束など……っ?!」

（どういうことだ？ 魔力が、ほとんど残っていない?!）

【ふふふ、無駄だよ。もうお前には、その拘束具を壊すほどの力すら残っておらんよ】

「何を言って……貴様、私に一体何を……おい、汚い舌で、舐めるなあっ！」

ぢゅるるっ♥ ぬるっ♥ ぢゅぬりゅうっ♥

「は、くううっ！」

男は無抵抗なカグラを笑うと太股から舌を這わせ、脚の付け根から股間……下着がズラされて露わになった大事な部分を舐め取っていく。

強い嫌悪感を抱いて制止するカグラだが、舌が秘部をなぞった途端、嫌悪を凌駕する異様な昂揚感に力の抜けた声が出る。

（何だ？！ こんな男に舐められただけで……身体が、疼いて……！）

【ふふ……「汚い」舌でもしっかり感じておるのう。高級茶の味がよほど気に入ったか】

カグラが喘ぐ様子を見て、男が満足げに笑う。

秘部を舐められて感じた昂揚——快感は、やはりカグラであれば普段は味わうはずのない感覚。

男の口ぶりからして、飲まされた紅茶には睡眠だけでなく、体力や魔力を抑える薬や、催淫の薬も含まれていたのだろう。

眠らせて拘束するだけでなく、力を奪い、更に辱めて弄ぶ。

愚劣の極みを平然と行う男に怒りが湧くが、同時に一つ情報を得る。

（何たる屈辱……！ しかし道具に頼るということは、つまりこの男自身には何の力もないはず……！  
薬が切れるまで、耐えられれば……！）

道具を使ったということは、男自身にカグラを眠らせ、発情させる能力はない。

となれば、薬が切れるまで耐え続けられ、脱出の可能性もあるはず。

冷静に考察し、希望を見出すが……逆に、今は男の陵辱を受けなければならないということでもある。

「んっ……な、舐めるな……触れるなああ……っ！」

（時間が経てば、魔力が回復する可能性もある……流されるな、魔力を絞り出せ……！）

【ふふふふ、必死に考えているなあ、いいぞお……！ 全てを理解する冷静さと思考力、絶望に抗う精神力……儂のモノになる女だ、そうでなくては、簡単に屈してはつまらんからなあ！】

「……下種め……！」

ぢゅぬるうつ♡ むにゅんっ♡

「んはあぁっ♡」

男は秘部を舐めると、次に上の服をはだけさせ、愛液に濡れた指でカグラの胸を揉みしだく。

粘液が擦れて舐められたような刺激が伝い、指が食い込むと胸の奥からまた甘い感覚が込み上げて媚びるような声が漏れる。

(く、そ……身体に力が入らない……！ 力を込めようとするほど……力が、抜けていくようだ……！)

【ほれほれ、抵抗するなら早くせぬか。どんどん身体が穢れていくぞお？】

「黙れ……！ これ以上……触れるな……ああっ♥」

(ダメだ……集中、しなければ……♥)

ちゅるっ♥ ぎゅむううっ♥

「くうううっ♥ ふ、触れるなど……あああっ♥」

(力が……♥ 意識が……集中できない……っ♥)

揉みしだかれて急速に火照った胸が、乳首を摘まみ上げられて更に発熱。

高まり続ける媚熱を抑え切れず、拘束されている状態でカグラは小さく仰け反り、大きな胸が音を立てるほど艶めかしく弾む。

胸のボリュームと感触が気に入ったか、男はまた一つ笑むと、カグラの上体に跨り、胸越しにペニスを見せ付ける。

【ふふ、想像以上の柔らかさと弾力だな……次はこれで楽しませてもらおうか】

「く、う……っ？！ 貴様、何をしている？！」

【儂がするのではない、お前がするのだ。ほら、儂のチンポに胸で奉仕するんだ】

精力剤でも使っているのか、下半身に聳えるのは風貌に見合わぬ巨大な肉塊。

性の経験に乏しいカグラでも、男のそれが平均と比べて相当な剛直だとすぐに分かってしまうものが、胸の谷間に挿し込まれ……

「何を考えている？ やめろ、挿れるな……」

ぬぶんっ♥

「あああっ♥♥」

豊満な胸に巨大な肉棒を埋めさせられる。

狙いは、所謂「パイズリ」……胸を使った前戯。

しかもカグラに奉仕させることを望んでおり、谷間に挿し込んで感触を楽しんではいるが、それ以上は動こうとしない。

【谷間に挿れただけで感じているところ悪いが、奉仕と言っただろう？ 胸で扱くんだ、早く儂を楽しませろ】

「か、感じてなどいない！ 貴様のような奴に、誰が奉仕など……」

【やはりそう来るか。ならば調教してやるしかないな】

がしっ、きちいっ♥

「何を……あ、んんっ！」

男はカグラの腕を掴み、拘束された手の代わりに肘を使って胸を圧迫。

そのまま前後上下に動かし、強引に胸で剛直を扱かせる。

【儂は寛大だからなあ、覚えるまでじっくり教えてやろう。ほら、こうしてチンポを刺激するんだ】

ずりゅ♥ すむっ♥ ずぬんっ♥

「あっ！ 触れるなっ！ あふあっ！ あ、熱い……っ！」

(何なんだ、これはっ？ 私の胸でも収まり切らないとは、何という大きさだ……。

しかも……あ、熱い……！ 胸が、焼かれそうだ……っ♥)

強引にパイズリ奉仕させられ、直接ペニスが押し当てられ、しかも顔に近付けられるが、気味の悪さよりも肉棒の灼けるような熱さに意識が向いて思わず言葉に出る。

独特の生臭さと混ざって肌に沁み込みそうな熱は胸を更に火照らせ、擦るたびに胸の感度が増しているかと錯覚するほど。

気持ち悪いはずの行為で徐々に熱が高められ、早く終わって欲しいと思うあまり無意識に胸を締め付けると、男が声を上げる。

【おお、今の感じだ……！ 流石は儂が見込んだ女、いい調子だ！ このまま胸に出してやりたいが……】

「だ、出すだと？！ やめろ、早く抜けっ！ 貴様の汚れたものを、そんなところで……」

【ああ、こんなところでは出さんさ……しっかり子宮に注いでやらんとなぁ！】

「何？！ き、貴様っ！ まさか……ああっ！」

男がペニスを引き抜くと、再び股間に手がつけられる。

今度は触れるという生易しいものではなく、挿入——本格的な性交、しかも膈内での射精を前提としたものだ。

いかに身体が穢されようと、それだけは許してはならない。

蹴りつける、あるいは股を閉じて何とか防ごうとするカグラだが、拘束されており蹴ることはできず、股も上手く閉じれず……むしろ剛直が押し当てられ、熱感への驚愕と痙攣で逆に脚を開き気味になってしまう。

【ふふ、一瞬股を開いたぞ？ お前も儂を望んでいるのではないか？】

「そ、そんなこと、あるはずが……」

【なあに、すぐに分かるぞ？ 自分の知らぬ本性と願望がな……】

ぬちっ♥ ぬぶ……♥

「やめろ……抜け！ それだけは……」

すぐ股を閉じ直すが、もはや遅く……醜く太った男が体重をかけると同時、一気に剛直が肉花卉を割り開く。

「やめ——」

ずぶうんっ♥

「っああああああああっ♥」

熱棒が捻じ込まれた衝撃で再び仰け反るカグラ。叫びは痛みではなく快楽によるものであり、圧迫感がそのまま媚熱の電流となって脳天まで送り、堪えようもない官能で気付けば声に出ていたのだ。

(おっ♥ 大きなものが、捻じ込まれ……♥ いかん、気をやっては……！)

【ふはははっ！ 流石はカグラ、オマンコも極上じゃないか……！ 少々早い、まずは子宮に挨拶代わりの一発目だっ！】

「ひっ！ 待てっ！ やめろおお♥」

丸々と太った腹を前後させるたび、剛直が肉襞を搔き回す。

その度に生まれる快楽電流と、膣内射精による妊娠の可能性。

それらを恐怖して制止しようとするが、悲鳴すら男にとっては情欲をそそるものでしかなく……逆に力強く突き上げられ、遂に性欲がぶちまけられる。

【記念すべき一発目だ！ しっかり味わえっ！】

ずぶうんっ♥

「やめろっ♥ やめ……あああっ♥♥」

ビュルッ♥ ビュビュウウウッ♥

「ああっ♥♥ あ♥♥ 熱いのが♥♥ 中にいいいつ♥♥」

煮え滾る欲熱が大量に注ぎ込まれ、愛撫とは比にならない痛烈なまでの肉悦でカグラは数度に分けて叫び続ける。

快楽と妊娠、両方に恐怖していたカグラだったが……一度射精されてみれば、今まで経験したことのない気持ち良さに意識を吞まれ、一瞬とはいえ快楽も妊娠の危険性も悦びとして受け入れていた。

我に返り、怒りと後悔で男を批難するが、凄んでいるつもりなのに甘撫で声しか出て来ない。

【ふう……出した出した。最高の締めりだったぞ、カグラ】

「き……きさまあ♥ や♥ やめろ、と……♥ いった、だろう、が……っ♥」

【その割にはマンコがぎざぎちに締め付けていたではないか。お前も軽くイッてしまったのだろう？ ありがたく僕の子を孕むのだな】

「そんなことはない……！ 誰が、貴様の子など孕むものか……っ！」

【ふふ、そうこなくてはな。では残念ながらイケなかった肉便器に、もう一度注いでやろう……！】

「なっ？！ これ以上続けるといのか？ よせ、抜け……あああっ！」

屈辱の極みだが、男が一度放精すれば、しばらく陵辱は避けられるはず。

そう思っていたカグラだが……男はカグラがふやけた声でも気丈に睨むことに嗜虐心を煽られたのか、何と続けて陵辱しだす。

期待が裏切られた上、ただの中年としては旺盛すぎる精力を前に、カグラは胎の底から不気味さを感じる。

(こいつ、一体どうなっている？ これほどの精力、どうやって……くそっ、また……♥  
中が……挟られ……っ♥)

【どうした、黙っていてはつまらんなあ？ それともチンポが気持ち良すぎて言葉にならんか？】

ぱんっ♥ ぱんっ♥ ぱんっ♥ ぱんっ♥

「だま……れ……！ こんな、ものっ！ 全く……良く、などお……！」

【こんなものとは失礼だな。愛想よく「おちんぼ様」とでも呼んで媚びてみる、そうすればもっと気持ち良くしてやるぞっ！】

ずばあんっ♥

「はうううっ♥♥ だ、誰が♥ 貴様に、媚びたりなどおお♥」

【仕方ない、ならばお仕置きの種漬けだ！】

ずっぱ♥ ずぶんっ♥ ぐちゅううっ♥

「んはあっ♥ も、もう、出すな……くふううっ♥

これ以上……汚らわしいものを♥ 出すなああっ♥♥」

ゴビュウツ♥♥ ビュブツ♥♥ ビュルウウツ♥

「あああああああっ♥♥」

(あ……熱いのが……また……♥♥ こんなものを、また出されてしまうなど……♥

いかん♥ 快楽に……吞まれぬようにせねば……♥)

一度ならず二度までも膣内射精され、しかも一度目と同等以上に感じてしまう。

汚らわしいと口にすることで嫌悪感を保てるものの、ともすればその感情すら快楽に吞まれそうで、カグラは必死に理性を繋ぎとめる。

【どうだ、オチンポ様の味は？ 目がうっとりしているぞ？ やはり……】

「黙れと、言っている……！ それ以上……耳障りな声を、聞かせるな……！」

【なに、すぐにその不快感もなくなるだろう……っ！】

ぬぶうんっ♥

「ああああっ♥♥」

(こいつ、まだ……！ しかも、さっきより精力が増している……？ あ、有り得ん……っ！)

息を荒くしながら言い返すと、男もまた陵辱を続ける。

快楽に追い込まれていくカグラとは対極的に、男の精力は衰えるどころか増す一方。

有り得ない事態に現実逃避するが、頭を振っても目を閉じてても快楽は変わらずカグラの肉壺を苛める。

【ふふふ、久々に抜かずの三発か。これは本当に今日中に孕ませてしまうかもしれんな……！】

「やめろ……！ おぞましい、ことをっ♥ 言うな……っ♥」



男が一層強くしがみついて腰を叩き付ける。  
言うだけあって、男の精液は量も多く濃度も凄まじい。何より確実に孕んでしまうと思えるだけの熱を持っている。

一度でも危ういというのに、立て続けに三度も出されれば妊娠する可能性は非常に高い。  
なまじ思考力が働くだけに客観的に分析してしまい、カグラは強く動揺する。  
何とか抜け出せないかと魔力を込めようとするが、また力が抜け、そして男は漲っていき……

「くっ♥ 離れろ……このおおっ♥」

(このままでは、本当に孕んでしまう……♥ いい加減、魔力が回復してもいいはず……！  
は、早く……逃げなければ……っ♥ くそおっ、力を入れれば入れるほど……力が、抜け……♥♥)

【くくく、抗うほどチンポに響いてくるのう……もっと抗ってみせろ！ ほれっ！ ほれっ！】

ずぶっ♥ ずぐんっ♥

「んはあっ♥♥」

(また、こいつの精力が強くなった……?)

「ま……まさか、貴様の魔法は……」

【ふふふ……流石カグラ、気付いたようだな。お前がいくら強かろうと、こうなつては僕には勝てん。既にお前の魔力は、僕の精力として流れ込むようになっているのだからなあ……！】

そこで遂に、カグラが回復せず、男の精力が漲り続ける謎が解ける。

男の魔法は吸収系……それも女の魔力を己の精力として変換し吸収するという類のもの。

相手の魔力が高ければ高いほど精力が増す……実力差があるほど効果を発揮し、カグラのようにトップクラスの魔導士相手ともなれば精力絶倫極まるというわけだ。

反面、デメリット——例として、触れなければ発動できない——などもあるはずだが、それを睡眠薬などで補うのだろう。

こうなればカグラがいかに強かろうと、むしろ強ければ強いほど男を調子づかせてしまう。

カグラは初めて、魔力を磨き上げたことを後悔するが、その悔恨も愉悦と精力に潰されてしまいそうになる。

「わ、私の魔力を、全て奪っている、のか……?! 貴様、如きに……そんな、ことおっ♥」

【平常時なら、そうだろうなあ。だが……！】

ごりゅんっ♥

「くふあっ♥」

【眠っている間に時間をかけ、たつぷりと吸い取ったからなあ。カグラと言えど寝込みに仕込んでしまえば、この通りよ！】

ずっぽおっ♥ ごりゅんっ♥

「あはあっ♥♥ おっ、奥を♥♥ 突くなあっ♥♥」

道具に頼って卑劣な手を使っておきながら、自慢げに肉根をぶつけてくる。

肉壺の奥……子宮を突かれ、そこに先端を押し当てたまま剛直が三回目の脈動を始める。

【この日のために、入念に準備をしてきたのだ。必ず儂のものにしてやるぞ、カグラっ！ 存分に孕むがいい……！】

「ひ……っ♥♥ やめろ、そこは……奥はあっ♥♥」